－所蔵作品紹介－

阿部　貞夫　ABE Sadao

峠

とうげ

作品データはこちら

連なる山々の頂にはまだ白いものが残り、樹木も裸とはいえ、下ばえの緑が山肌を覆い始めている。春のなかば頃の北海道では典型的な自然の表情のひとつである。

道内各地を旅しては山岳や原始林、湖などを木版画で表した作者は、峠道の途中、ふと眼にとめて心動かされたのであろう。自然から受けた感動を「心の浪」と、彫刻刀の刻み跡を「彫波（ちょうは）」と呼んだ彼にとって、両者の直結こそ木版画表現の真髄であった。確かに山塊の骨太で重厚な描写、萌え出る緑そのもののような細かい無数の彫痕は、自らの印象と木版画の基本技法のいずれにも忠実であり、彼の仕事の大きな魅力はこうした素朴なまでに率直明快な表現にある。それが時に思いあふれてか、叙情に流れ過ぎる場合もあるが、ここでは鋭角的な形を幾重にも重ねた山の描写が構築的であり、画面をひきしめている。

阿部貞夫は東京で生まれ、北海道留萌市で育った。青年時代に画家を志して上京するが、戦後留萌に戻り、製材所で働くかたわら木版画制作に力を注いだ。1953年に釧路に移ってから関野準一郎らの指導を受けて版画家として独立、47歳で初個展を開き、またその前後から道内・国内の公募展で認められ始めている。1958年にはアメリカでの「現代日本版画展」（セントジェームズ聖公教会主催）に入選した。札幌で没。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より